

エドゥアルト・シュプランガー著
『教育における意図せざる副次作用の法則』(1)
(翻訳)

代表者：岩間 浩

訳者 はしがき

このユニークな名称を持つ原著 *Das Gesetz der Ungewollten Nebenwirkungen in der Erziehung*, Heidelberg : Quelle und Meyer, 1962 は、ドイツが生んだ著名な教育思想家 Eduard Spranger (1882-1963) の最晩年の著作であり、この著書を出版してから一年後の 1963 年、にシュプランガーは他界している。いわば彼の遺書とも言える書である。

このなぞに満ちたタイトルの書で、一体シュプランガーは何を述べたかったのであろうか。

自然現象の中で予期しえない現象が日常的に起こっているように、教育という人間関係の領域において、予期しえない現象があたかもそれ自体が法則であるかのように生起していることに、シュプランガーは深い関心を払い、その解明に向けて努力を傾注した。

教育現場において我々は、一定の目的と計画を携えて臨むのであるが、児童、生徒や学生の状況によって、思わぬ変更を余儀なくされる。のみならず、教師の語った一言が良かれ悪しかれ、全く予想もしなかった影響を被教育者に与えることがあることを、教育者は痛感する。そこにかえて教育の妙味があるのではないか。

一方、あまりにきちんと計画された授業や講義が生命を失い、硬直化し、空回りになったり、独り善がりになったりすることも、まま経験する。

こうした現象に教育の本質とも言うべきものが存在しているのではないかと、これに教育における「意図されざる副次作用の法則」と名づけて、シュプランガーがこの現象の意味を解明しようとしたのが本書である。

本書の翻訳の経過と、本書の意義についての考察は、訳者の「あとがき」で詳しく述べるとして、早速、本文に入りたい。今回は、その第一回として、序言と第一部の途中までの翻訳を載せる。読者諸氏が、これによって教育の本質について、吟味するよすがとなれば幸いである。

序

この第三の著作は、同じような形で以前に発表した二つの論文、『小学校の固有精神』と『生まれながらの教育者』に、予期に反して付け加えられることになった。これは前に挙げた二作と同様に、将来の教員のための養成所において、いかに哲学的・教育学的思考を展開させることができるかのひとつの指針を与えることができるように企図された。したがって、ここで重要なことは、——あたかも植物採集に出かける時のように——できる限り多くの興味と疑問を抱かせる箇所に関わる、ひとつのこみち小径 (einen Weg) を選び出すことにある。さらに、この著作においては、ある技巧くふう (ein Kunstgriff) を用いた。だが、それがどこにあるかをあらかじ予め洩らすことになれば、その魅力は失われるにちがいない。

しかし、この技巧ゆえに、比較的タイトルが長くなってしまった。なぜ、私がヴィルヘルム・ヴント以来よく知られている「目的の異常生殖⁽¹⁾の原理」という表現を用いなかったかの理由は、本文において説明されるであろう。

この『教育における意図されざる副次作用の法則』には、私が書いた論文の一部⁽²⁾を、体系的説明のために再録した。厳密に言えば、体系的な解明のためというより、むしろ「折に触れての思考」(gelegentliche Gedanken) の場を提供したといえる。それは、教育学の基本的問題に関心のある誰もが、哲学のうっそうとした繁みに導かれるということ、望んでいるとは限らないからである。

この著作での「望ましい副次的効果」(erwünschter Nebenerfolg) は、教育制度における絶対的に善である組織というものはあり得ない、ということ、学校改革の推進者たちに理解してもらおうということにあらう。いかなるところにおいてもなお、長所には切り離すことのできない短所が必ず付随しているものであることを、18世紀の人々は共存可能性 (Kompossibilität) の法則として、今日の我々以上に知っていた。あまりにもいやいやながら妥協された提案においては、断固たる意欲が潜んでいるような特徴的な形態は生じない。この著作では、どこでも、いつでも必要であるただひとつの陶冶目標に立ち返ることを試みた。自由の教育学 (Pädagogik der Freiheit) の根本思想から生じる陶冶目標がそれである。実際にはさらに、その陶冶目標の多様な刻印と拡大を与えることができる。そうすることは、自由勝手にしたり、妥協したりするのではなく、現代における文化生活の全体的構造において、その場にふさわしい、深い正当性をもたらすことになるだろう。

私が前に言った技巧は、まず、1960年11月18日のキルヒハイム／テック(Kirchheim/Teck)地区の教育団体の招聘で行った講演で用いたものである。客を厚遇する優しさをもった、あの土地の快さは、懐かしい思い出となっている。高齢者は、いつでも、どこでも、同じものにはしか出会わないというベン・アキバ^③の思いに、必ずしも同調する必要はない。逆に、希有なものには、それがどんな種類のものであっても強い感情を抱くものである。

今度もまた、校正に際して、篤い援助を傾けてくれた、プロヒンゲンのゴッドフリード・プロイエル氏に感謝を捧げる。

チュービンゲンにて 1961年11月1日

エドゥアルト・シュブランガー

〈訳注〉

- (1) ヘテロゴニー (Heterogonie) : 周期性単性生殖、または異常生殖ともいう。両性生殖と単為生殖とが交互する世代のこと。
- (2) 1957年に友人のエルンスト・オットーの記念論文集に取めたもの(本文においては、文章中に書かれていたが、一文が長くなる関係で削除した)。
- (3) ベン・アキバ (Ben Akiba) : (50頃 - 130頃) パレスチナのユダヤ教のラビ、教師。ヤッファにラビ養成のための学校を設立し、ミシュナの編集に大きな役割を果たした。

第一部

I 法則のもつ限界について

この考察のタイトルは、奇異な感じを与えるものかもしれない。ここで取り扱われる事柄は、各自の経験に照らし合わせれば、誰でも知っていることだからである。つまり、もしわれわれの意図しようとするものが、十分に考え抜かれたものであるとしても、それが運命の漠然たる歩み、または愚かな偶然によって、妨げられてしまうということ以上に、ありふれたことが他に何かあるだろうか。われわれは、計画を立て、意図し、そのことに対して行動することができる。だがその結果を、われわれは誰も意のままにすることはできない。そして、教育の領域ほど、明確に幻滅を感じさせ、またそれが起きる領域は他にない。このことについて、新たに独自

の本を書くことは、余計なことのように思われるかもしれない。また、若い教師の生き生きとした確信を萎えさせてしまうことでもあり、危険でさえあるのかもしれない。

しかし私が強調したい点は、誤った作用、もしくは意図されざる副次作用そのものにあるのではなく、このタイトルを「意図されざる副次作用の法則」(Das Gesetz der ungewollten Nebenwirkungen) というふうに取り読んでいただきたい。本論においては、「生命の歩み迷う行路」(des Lebens labyrinthisch irren Lauf) を嘆くことが問題なのではない。そうではなく、ある法則について語られる時に、不気味で非合理的なものは、ある種の緩和がなされても、悲観論の原因ともなりうるものであるが、それは同時になぐさめの微光によって彩られるものである。つまりここでは、生命が支配しているのであり、このような法則が教育家 (Pädagogen) に対して、関わりが無いままであってはならないのである。なぜならば、教育家はまさに、その生命のために教育を施すからである。したがって彼らは、自らの行動において、人間の世界から遠ざかることのない関係を覚悟しなければならず、最初からそれを計算に入れて、可能な限り首尾よく終わらせようとするか、あるいは、教育者すなわち、人間の教育者 (Menschenerzieher) は、人間的なものに疎くてはならないという理由で、内心それ (法則) に甘んじなければならないであろう。

しかしながら教育者は、いま一度立ち戻って、その法則についてじっくりと考えてみなければならない。一般的理解においてそれは、われわれの行動について、いつでも意図したことは異なる何かが生じるということしか意味していない。けれども法則のもつ影響力は、それが支配している領域に応じて変わってくるものである。なぜならば各領域により、ある役割を果たしている諸要因が変化^{いぶき}するからである。われわれが、物だけに影響を与えることができるのか、それとも生氣^{いぶき}を与えられた存在、すなわち人間までに影響を与えることができるのかについて、大きな違いがあるのだということをあらかじめ知っておく必要があり、そのような可能性を吟味することから、説明がはじめられるべきであろう。

A 「教育者の活動は、人間において一種の目的的行為である」というこの目的設定は、ひとつの計画全体を規定している。だがその実現のためには、それぞれ固有な目的を追求している個々の小さな行為の積み重ねが必要なのである。教育的行為が、まだその充分な固有性を顕していないかぎり、教育しようという意志

は、ある種の形成意図に基づいて行われるという、非常に漠然とした観念が許されてもよいであろう。教育の結果は、人間の形成 (Form) あるいは形状 (Gestalt) に現れるはずである。しかし形成というものは、およそ形成されるべき素材の性質と固有性に依じて、多様な変化を見せるものである。例えば、生命のない素材から、それができてくる場合がある。これは、手細工もしくは手工業についてあてはまる(「取り扱う」という語の起源は、まさにそこにある)。第二に動物や植物といった生命あるものを形成する場合がある。この場合、形成するということ (Formung) には、わずかな活動の余地しか与えられない。生けるものの全ては、自らの固有な内的形成様式をもっているからである。われわれがしつけや養育について語る時には、この領域からの人間の物質的および精神的世界の有意義的な形成全体に広く根をおろした名称、すなわち文化が生じる。文化という語は、ラテン語のクルトゥラ (cultura) より派生し、また、コレレ (colere)、つまり世話をするという意味の言葉に由来する。近代ギリシャ語において、それに対応する語であるポリティスモス (πολιτισμός) は、別の思考様式から由来している。すなわちギリシャ語のそれは、定住するということを基礎に置いて、強調する言葉なのである。第三に教育が形成するという観点で用いられる場合、そして自らの力で発達する人間が素材の役割を果たすという場合、言葉に詰まるところがある。それは、心に浮かんでくる感情についての少なからぬ兆しを意味している。つまりこの三段階を通じて、いわゆる素材の抵抗がますます大きくなるにつれて、目標の達成は困難になるのである。

しかし抵抗は、それ以前の段階においてもないわけではない。われわれの目的行為とその行為には、どこでも次のことが当てはまる。それは達成されたものは、われわれが結果として描いたことと決して完全に一致するわけではないということである。われわれが本来「意図」(gewollt) した結果は、意図したとおりになるとは限らず、いつも何らかの点で「ズレ」(schief) が生じてくる。ビリヤードの球は、われわれがそれをぶつけようとする方向には正確に行かないし、それが台の縁に行くとき、まったく他の諸要因がそれを支配しはじめる。その運動方向と偏向は、決して偶然ではなくそこにいつでも運動法則がはたらいていると、われわれは確信している。しかしこの法則は、— このような比喩を用いることが許されるならば — 最初から、正確にわれわれが描く、すなわち「意図する」(wollen) 方向の意味では作用しない。最初からわれわれは、諸要因が固有な法則性をもつ諸要素を外界から取り入れており、この境界では、何か「疎遠な」(Fremdes) ものが、その権限をは

たらかせ始めるのである。われわれは、このように規定されたものに従うことによつてのみ、成功することができる。「われわれは、自然に従つてこれを克服しようとする」(Naturam parendo vincimus)。だがそれでもなお、われわれの意図と一致しないものが常に残るのである。

この残り — すなわち、まさに「意図されざる副次作用」 — に関係して、すぐさま次のことが明記されなければならない。それは広範な経験に基づいて、一部分はすでに前もって、それが予見できるということである。しかし他のものは、まったく計算できない、偶然的(偶発的)な、デモニーニッシュ(demonisch)⁽¹⁾なそういったたぐいのものとして「現れる」。そうしたものは、おそらくわれわれの価値傾向の意味において和らげられ、ひとつには予測される副次作用として、二つには、秩序を掻き乱す副次作用として可能になる。これら二種類の副次作用の境界線は明確ではない。というのは、経験と認識の進展に伴って、はじめは知らされていなかった法則的諸関連が、われわれから独立した自然の大法(Weltordnung)の中で発見されることがありうるからである。まったく異なった種類の間い、すなわち予測しうる副次的結果(つまり第一法則の副次的結果)は、ある程度またはある方向で、われわれの意欲に従つて制御できるかどうかは、さしあたり背後に退けられるべきである。それは、ケース・バイ・ケースで非常に多くあるからである。

B われわれのいう法則が、いかなる時代においても、まったく気づかれないうことはありえないであろう。しかし私見であるが、最初にそれを明確に規定したのは、世界的な思想家であるヴィルヘルム・ヴント⁽²⁾である。彼においてそれは、私にはまったくふさわしく選ばれたようには思われな、少し別の名称を用いている。彼は「目的の異常生殖」の法則と呼んでいる。実際に他種性(異常生殖)は見えてとることはできるが、意図の中に先取りされている目的観念と行為によって、実際に生み出される結果との間には不一致が生じる。したがって「作用の異常生殖」と表現する方が、私には相応^{ふさわ}しいように思える。目的の異常生殖の法則が、ヴントの哲学におけるいろいろな領域において — 部分的にはかなりの変化を認められるが — 有効性をもつ3つの普遍的法則のひとつであることは、ここでは考慮に加えない。たとえ人が、もっとも単純な形式において、すなわち意図したことと実行の不一致にあるとしても、それは単なる心理学的法則ではなく、意欲する主体と(意欲から独立した)客観的世界との間の対立における結果についての陳述にすぎない。

ヴントの簡潔かつ根本的である思想を明確に表現している表現を引用することで、私は満足を得ることができる。けれども、引用直後のヴントとは相容れない私の考える用語については、括弧【 】を用いて補足の説明を加える。「通例としては、客観的に得られる目的【外的世界あるいは心的外世界 (außerseelische Welt) における行為の結果】は、それに先行する目的動機【結果を先取りし、意欲を伴う結果の表象、あるいは本来意欲とされたもの】を超えて外へと出て行く。目的表象が因果的条件として事象の過程に関与する場合、いつでも原因として作用している目的動機【予想される結果の観念】は、この原因の作用として生じる客観的目的【実際に結果】と必ずしも一致するわけではなく、後者は、それに先行する目的観念を大なり、小なり超えて出て行く。あるいは反対に、作用する諸条件の影響を受けて、それに及ばないこともある」(『哲学体系』、ライブチツヒ、1919年、第1巻、326ページ)。

「したがって、目的に従い行われる意欲は、いかなるものであっても、予測がされなかったゆえに目的〔結果〕に到達する。……」(前掲書、327ページ)。

上辺だけのことにすぎないかもしれないが、第二の引用について最後の文の「ゆえに」は奇怪な感じを与えるので、「そして」に置き換えたほうが無難であろう。さらに加えるならば、最初の部分の表現は、あまりにも特殊すぎる。われわれの行為は、われわれの意図した以上のことや以下のことが、しばしば生じるということだけに、誰もが関心を示すとは限らない。「結果は、意図とは別のものを含んでいる」といった表現の方が、より慎重であり、一般的であろう。

*

これまで行ってきた導入に、最後の観点がなお必要である。つまり、「意図されざる副次作用」(Ungewollte Nebenwirkungen) という表現では、獲得されたものに対して、望まれない、目的に反する、あるいはまったくの不都合を伴った現象が重要であるということが必ずしも明らかにされていない。サウルは、父であるエゼリンネンを探すために旅に出るが、その際に王国を発見するといったような事例を思い起こしてもよいであろう。プラトンは、善の本質を探究し、学問を発見したと語られてきた。しかし以下の考察は、価値的な意味で望まれない (unerwünschten) 副次作用、すなわち意欲にもとづいて定まる目的に照らし合わせると、否定的な性格を負う副次作用に限定されることになる。この種の経験は、それが合理化可能な副次作用の第一法則に起源をもつものであれ、あるいはわれわれが副次作用の第二法則とみなす非合理的な副次作用に起源をもつものであれ、やがてその情緒的かつ実用的動

機である意欲に、修正を加えるようにはたらくであろう。生活経験はいつでも教訓的であり、人類は多くの真の進歩を集合的经验に負っている。しかし実際の結果に基づく实际的行為の修正に関していえば、強調されているように、そのことは何にでも当てはまるということにはならないであろう。我々が迫ろうとしているテーマにおいては、すなわち教育の領域における法則の現れ方においては、このような疑問がまた重要な響きをもつことになろう。(原注)

(原注)

ヴィルヘルム・ヴントは、『心理学綱要』(第10版、ライプツヒ、1911年)の中で、主に精神発達の観点から目的の異常生殖の法則について述べている。彼によって以前に定立された精神生活の一般的諸原理、とくに創造的成果と結びつく原理は、精神的生活の本質的高揚を意味している。それが主に明瞭に示しうる意志過程に関するものであれば、それは倫理学に特別な意味を与えることになる。この立場からなされるヴントの定式は以下になる。「ここで前もって立てられた目的に対する作用の関係が……定立される。その結果、当初から副次的結果が常に生じてくる。すなわち、第一に先行する目的観念においては考えられてはいないにもかかわらず、新しい動機の序列が生じ、かくして今までの目的【目的設定】を変えるか、あるいは新たな目的を加えることになるからである」(405ページ)。

(訳注)

- (1) dämonisch:デーモンの、魔人の、悪魔的な、超自然的な、人知を超えた、抵抗しがたい、不気味な、ものすごい。
- (2) ヴィルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt): (1832 - 1920) ドイツの生理学的心理学者、哲学者、実験心理学の建設者。後代の心理学の発達に多大な影響を与えた。

II 暫定的な事例に即しての説明

自然法則 (Naturgesetz) というものは、二つの概念的に (場合によって数量的に) 正確に規定される現象複合体の明白な連続性を思想上、取り出して固定化することを常としている。われわれがここで取り組んでいる規則 (Regel) は、決してこの意味における自然法則ではない。むしろ、われわれが問題にしているのは、不確実性

の関係といった方がよいだろう。というのは、この規則の場合、はっきりと定まっている意図と、その実際上の結果との間に、いつも必ず、何らかの不一致的關係が入り込むからである。またわれわれは、このことに、「原則」(Prinzip)という表現を使うこともできるであろう。通常原則というものは、最も異なる領域においても一貫して確認されるものである。それゆえそれは、「行為者の意図の中に、あらかじめ示されなかった行為の結果部分を常に探求せよ」という探求原則として機能しうるものである。そしてそれは、内容的にあらかじめあるものとして考えるようなものではなく、何らかの事実的なものとして受け取られなければならないものであろう。

さらに意図されざるに部分については、そもそも生起のいかなる法則には属さないという見解を退けるという方法によって、まったく別の把握を可能とする。われわれから独立した世界に入り込む行為は、いかなる時であれ、その世界で支配的な固有の法則性にいきつく。往々にして当該領域に固有な法則性はまだ知られていない。すなわちこの意図されざる部分は、前もって探求されるものであり最初の段階から「計算に入れ」(rechnen)ていなければならない。人はまたこの「抵抗」(Widerstand)に影響を及ぼし、支配をすることもできるが、それができない場合もある。これら全てのことは未決定にされており、ただ確実なのは、その固有の法則性の根底にある要因とわれわれの行為との衝突であり、意図の内容と引き出された結果の不一致だけである。われわれのいう「原則」ないし「基礎法則」とは、それ以上の意味を持たない。

「われわれから独立した世界」(die vonäuns unabhängige Welt)、それは固有かつ心的なものが、非心的なもの(物理的なものあるいは精神的なもの)へと変化する不可解な境界から始まる。またそれは、われわれの身体に固有なものが、身体外的素材(物的なもの)と出会うところで始まる。この著しく形而上学的な問題をわれわれは吟味しようとは思わない。なぜならばそうでないとするならばわれわれは、実践の問題に達するのは困難だからである。それゆえにここでは、広く行き渡っている見解によって満足を得よう。

これからあげるいくつかの例は、さまざまな種類の固有法則性を代表する領域ごとに、それらをグループ分けしなければならないであろう。そこでもわれわれは慣習的区別に従い、単に願望によって導かれる、われわれの行為がどのような種類の現実に「出会う」(auftritt)かを、問うことにしよう。

A 生命のない物質領域からの事例

われわれはよく、この領域を物理学的構造の管轄する領域と同一視する。これは不適当ではない。なぜならば、諸力および素材を支える存在がいぜんとして隠されているからである。しかしわれわれは、いたるところで有機体、精神の担い手および精神的形成においても、物理学的研究の概念や方法によって探究されうる層を見出すということを知っている。したがって、われわれはそれを思考的把握という適切な仕方から事柄領域を想定する。

1. 私が、二つの平行かつ垂直な壁を屋根で覆うという目的を設定するとき、水平に位置する梁を選択すれば、わずかな副次作用しか生じない。しかし私が三角の屋根を選択すれば、壁を外へ押しやる横方向への圧力が壁の上から生ずる。この意図せざる副次作用が私に、壁を相応しい方法で強化することを強要する。私はそのような支柱それ自体には何の興味も抱かない。静力学および動力学によって、それが私に課せられるのである。どんな子どもでも既に積み木によって、この種の経験をしている。いかなる建築家さえも、材料の世界に転換されたときに気付かされる副次作用に即して、純粋に思考上の組み立てを絶えず修正していかなければならない。

2. 私の自動車のモーターは、目的に応じて機能する。しかしそれは、数時間後にオーバーヒートを起こす。この意図されざる副次的結果を防止するために、私は冷却装置を備え付けなければならない。エンジニアとしての私は、冷却装置に何ら興味を覚えない。だが物質界で支配している固有の法則性が、付加的装置を私に強要するのである。

二つの—非常に単純な—これらの例には、意図されざる副次的結果をなくすということが容易であるということが共通している。このことは、いつでも上手くいくとは限らない。人間には技術的可能性に限界があり、重力の作用を取り除くことはできない。永久運動 (Perpetuum mobile) は組み立てられない。それは、エネルギー保存の法則は克服されえないためである。

B 有機体の領域からの事例

1. ある農夫が、木材から利益を引き出すために森林の木を切り倒すならば、木を切り倒された全地方において、気候や植物群および動物群に変化が生じる。大きな地域が、それ自体としては危険ではないと思えた、そのような行動によって不毛なものになる。

2. 害虫を駆除するために動物を使って根絶しようとする、逆に有害な昆虫を増大させうることがある。人間がこの有害な昆虫と戦おうとするならば、その昆虫の天敵である他の動物類を、その地に移り住ませなければならぬ。しかしその新しい動物は、植物界にとっておそらく人間の理解を超える害となる。それゆえに、繁栄と破滅が交代を繰り返すのである。つまり生命というものは、その固有な法則にしたがって運動するものであり、非常に一面的な目的設定による人間の介入を顧慮しない。ヴァルター・フォン・モローの『ムルナウアー日誌』は、面白い例をあげている。彼は、彼の所有する沼に生息する忌まわしいヒキガエルを駆除することを思いつく。そのために池を作り、おたまじゃくしを駆除する鯉を池に放つ。ところが鯉は増殖しすぎ、頼りげない第二の世界創造主による処置の後に、循環の鎖はヒキガエルがまたそこにいるということで閉じるのである⁽¹⁾。

C 人間の社会生活からの事例

1. 労働者の賃金を彼らの富裕のために上げたとして。その結果として、労働者により生産される製品の価格も上昇する。すると間もなく、お金を用いた購買力は低下し、労働者は賃金上がる以前よりも良い状態にあるとは言えなくなる。因果循環が続く。

2. 特定の種類への工業プラントは、ある地域に住む人々の生活水準を向上させる。しかし廃水は飲料水の供給を害し、このことは関係のない住民にも影響を及ぼす。経済上の目的設定そのものにおいて、設備を費やす必要が生じてくる。水路の汚染が魚に死をもたらし、海に流出した油は、水鳥たちを死滅させる。工業化がもたらした、また将来においてももたらすであろう意図されざる副次作用のおよぼす完全な範囲について、十分な観念をわれわれは、まだ持ち合わせていない。

3. 交通の規制のために、われわれは都市部の幹線道路に信号機を取り付け、車を通行させたり、停車させたりする。ある時には歩行者に車道を横断するための信号機を取り入れる。今やそのような交通設備によって、車が全く停車する必要のないバイパスへと車の流れは移り、主要幹線道路はガラガラになるのである。

特に最後の例は、明確に以下のことを浮かび上がらせている。すなわち人間の文化全体において、われわれの法則ないし原理は、決して促進的役割を果たさない。まさ

に有益な活動によって生じる、故意ならざる弊害を取り除くためには、さらに多くの努力がなされなければならず、多くの防止処置や手直しを講じなければならない。現段階においての産業と技術について、われわれが強く感じるのは、それ自体有益な行為の側面として作用しても、重大な災難が生じるということである。そこからしばしば生じてくるのは、行為の不確実性であり、したがって行為主体への心理的反作用であり、それによってW・ブントのオブティズムが虚言であると非難することになる。われわれはキルケゴール⁽²⁾の次のような言葉を思い浮かべる。「結婚する。汝は後悔するだろう。結婚しない。汝は後悔するだろう。結婚をするにしろしないにしろ、汝はいずれにせよ後悔をするだろう。」——（『あれか—これか、陶酔的陳述』、1842年。）

われわれのテーマの概略は示された。加えて諸例で3種類の意図されざる副次作用があることを確認することができた。つまり第一の種類の、（経験を積むにつれ）予見することができ、その予見にもとづいてわれわれ本来の意図する意味で、ある程度訂正することができる。第二のそれは予見することができるが、一度とって進められたプロセスでは危害を取り除くことはできない。第三のそれは予見することもできなければ、繕うこともできない。全く予見することもできず、予期されることもなく、無気味に突然入り込み、われわれの意図を妨げる一度限りの運命の巡り合わせがそれに属する。これらの種類を分ける境界は、これまで強調してきたように流動的である。それは当該行為の主体には、等しくない才能と知識が与えられているからである。

しかしながらすべての意図されざる（または望ましくない）副次作用に共通なのは、それが意図し、行為する主体の意識に反作用するということである。そこで生じる意向の変形が倫理的に重要であるとすれば、新しい考察の観点が生まれる。まさにわれわれの原則を教育学的領域へ適用していくことにおいてこそ、それは非常に重要な要素であろう。したがってそれらには、別の節が割り当てられよう。

〈原注〉

(1) ヴァルター・フォン・モロー (Walter v. Molo):『沼の悲劇』『私はどこに平和を見出したか』ミュンヘン、1959年、224ページ。

〈訳注〉

(2) キルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard): (1813—1855) デンマークの哲学者、神学者。20世紀の実存主義に大きな影響を与える。